

国立大学法人島根大学の平成27事業年度決算概要について

(財務諸表の内容について)

- 財務諸表は、①貸借対照表、②損益計算書、③キャッシュ・フロー計算書、④損失の処理に関する書類、⑤国立大学法人等業務実施コスト計算書並びに⑥注記事項(重要な会計方針ほか)及び⑦附属明細書から構成されています。

本財務諸表は平成28年6月28日付、文部科学大臣の承認を受けたものです。

(貸借対照表について) 1頁

- 資産の部、負債の部及び純資産の部から構成されています。「固定資産」は減価償却累計額の差引後合計で545億95百万円、「流動資産」は現金及び預金、未収入金、医薬品等のたな卸資産などの合計で92億53百万円、資産合計は638億49百万円となっております。
- これに対して、「固定負債」は減価償却に併せて収益化するための資産見返負債が70億74百万円、このほか法人化以前からの借入金である国立大学財務・経営センター債務負担金、法人化以後の借入金である長期借入金、退職給付引当金、長期リース債務を含め、合計で236億64百万円、「流動負債」は主に、寄附金の未執行額である寄附金債務が14億33百万円、このほか一年以内返済予定国立大学財務・経営センター債務負担金や一年以内返済予定長期借入金、未払金など、合計で75億26百万円、負債合計は311億91百万円となっております。

また、「資本金」は政府出資金として387億72百万円、「資本剰余金」は特定資産の取得等による増加分などを計上した計144億40百万円から、病院以外の償却資産に係る損益外減価償却累計額等の差引後で▲47億62百万円、「繰越欠損金」は前中期目標期間繰越積立金のほか、損益計算書の当期総利益2億62百万円を含む当期未処理損失▲13億96百万円の計▲13億51百万円、純資産合計は326億58百万円となっております。

(損益計算書について) 2頁

- 「経常費用」は、教育と研究を区別することや人件費を区別することなど特徴的な整理が求められています。業務費は教育経費が18億64百万円、研究経費11億42百万円、診療経費106億18百万円などの物件費のほか、役員、教員、職員の人件費(合計すると174億56百万円)を含めて合計で321億88百万円、一般管理費10億95百万円、長期借入金の支払利息等の財務費用2億25百万円などの合計で335億21百万円となっております。なお、費用の明細は附属明細書「(15)業務費及び一般管理費の明細」(P21)を御参照願います。

「経常収益」は、運営費交付金収益102億16百万円、授業料収益31億84百万円、附属病院収益170億9百万円などのほか、受託研究や寄附金等の外部資金にかかる収益、減価償却に対応して負債からの戻入による収益、財産貸付料収入などの雑益により、合計で337億51百万円となっております。この結果、経常費用との差引合計として、2億29百万円の「経常利益」を計上しております。

また、上記以外に、第2期中期目標期間の最終事業年度の決算による運営費交付金収益など33百万円の「臨時利益」を計上し、「当期総利益」は2億62百万円となっております。

これは、病床稼働率上昇等（患者数の増・手術件数の増等）に伴い、附属病院収益が増加し、また附属病院再開発に伴う減価償却費を含む設備関係費が減少し、看護師等医療職員増員に伴う人件費及び材料費など費用が増加した科目もありましたが、相対的に収益が上回ったことが主な要因です。

- 経常利益の内訳は、附属明細書「(19)開示すべきセグメント情報」(P27)の業務損益のとおり、附属病院 3億69百万円、附属学校・園 17百万円、国立学校 66百万円、法人共通 ▲2億24百万円となっております。

附属病院セグメントの業務損益は、対前年度比7億8百万円(209.4%)増となっております。

また、附属学校・園、国立学校、法人共通セグメントの業務損益の合計は、▲1億40百万円と、対前年度比2億7百万円(308.3%)減となっておりますが、これは退職手当が見込みより1億75百万円増加し、本学の自己資金で立替支給したことに伴う費用が発生したことが主な要因です。

(キャッシュ・フロー計算書) 3頁

- 事業年度内の資金の増減について、業務活動・投資活動・財務活動に区分して表示するとともに期末において保有する資金の額を表示するものです。
- 「業務活動によるキャッシュ・フロー」は、投資活動及び財務活動以外の取引による資金移動の状況であり、教育・研究・診療等の業務費に相当する「原材料、商品又はサービスの購入による支出」は110億66百万円、「人件費」は173億86百万円、一般管理費に相当する「その他の業務支出」は9億13百万円などに対し、運営費交付金収入をはじめとする法人の基本的収入があり、合計で29億31百万円となっております。
- 「投資活動によるキャッシュ・フロー」は、固定資産及び投資資産の取得等に係る資金移動の状況であり、医学部実習棟改修工事に係る施設費など有形固定資産の取得による支出が16億12百万円に対し、国からの施設費による収入は、7億11百万円などにより、合計で▲8億2百万円となっております。
- 「財務活動によるキャッシュ・フロー」は、附属病院施設・設備の整備等のための新規借入れは行わず、法人化以前からの国立大学財務・経営センター債務負担金の返済3億49百万円、法人化後の長期借入金の返済7億2百万円、リース債務の返済5億49百万円、返済利息2億27百万円により、合計で▲18億28百万円となっております。
- この結果、期末残高は54億50百万円であり、貸借対照表の「現金及び預金」54億50百万円と同額となっております。
- なお、「重要な非資金取引」として、ファイナンス・リース及び寄附による資産取得を欄外に注記しております。

(損失の処理に関する書類) 4頁

- 貸借対照表及び損益計算書で説明しましたとおり、「当期未処理損失」として▲13億96百万円を計上しており、この処理方法を記載したものです。

「損失処理額」として前中期目標期間繰越積立金取崩額45百万円を計上し、「次期繰越欠損金」は、▲13億51百万円となっております。

(国立大学法人等業務実施コスト計算書) 5頁

- 国立大学法人の業務運営に関して国民が負担することとなるコストを集約し、開示するためのもので国立大学法人会計特有の書類となっております。
- 「業務費用」は、損益計算書に記載される経常費用の合計額 335 億 21 百万円から、運営費交付金、補助金などを除いた自己収入 223 億 61 百万円を控除した額 111 億 60 百万円を計上しております。
- 「損益外減価償却相当額」は、本来、費用計上されるべき減価償却費を特定償却資産の場合は減価に対応する収益が予定されていないため損益外(貸借対照表の資本のマイナス勘定)としているため、これをコスト認識したもので 10 億 98 百万円を計上しております。
- 「損益外除売却差額相当額」は、特定償却資産の除売却損相当額をコスト認識したもので、77 百万円を計上しております。
- 「引当外賞与増加見積額」「引当外退職給付増加見積額」は、承継職員に係る賞与・退職手当が運営費交付金で財源措置されることから引当金として費用計上していないため、相当額をコスト認識するものです。「引当外賞与増加見積額」においては、実支給額より引当金相当額のほうが少なかったため、▲24 百万円を計上しております。「引当外退職給付増加見積額」においても、実支給額より引当金相当額のほうが少なかったため、▲71 百万円を計上しております。
- 「機会費用」は、本法人に対する土地等の政府出資や無償譲与、無償貸与等について、国等がこれらの財産を他に運用した場合に得られたであろう利益の喪失を本学の運営に要したコストと見なし費用計上するものであり、1 百万円を計上しております。
- 結果として、業務実施コストは、122 億 42 百万円となっております。

(その他の書類) 6頁～31頁

- 「注記事項」(I. 重要な会計方針)は、国立大学法人会計基準において記載が求められている注記のうち、書類を作成するに当たって採用した会計処理の原則や表示方法など、基本的でかつ重要な取り扱を一括して記載したものです。
- 「附属明細書」は、貸借対照表及び損益計算書等を補完するための書類として作成が義務付けられており、25項目の明細書が定められています。